

チェルノブイリの子どもたち

チェルノブイリ子ども基金 NEWS No. 114 2019年10月19日発行



*** 2019年夏 子どもたちの保養が行われました



★ウクライナ



★ベラルーシ



**2020年チェルノブイリ救援カレンダー完成しました
お申込み受付中！**

詳細は同封のチラシ、本号12頁をご覧ください

~~~~~ 本号の目次 ~~~~~

- p.2~5 子どもたちの夏の保養
- p.6~9 「希望」設立25周年
- p.10 黒部ドクターのお話
- p.11 ふくしま便り
- p.12 2020年カレンダー

- p.13 販売品のご案内
- p.14 里親のページ／「内分泌研究所」
- p.15 募金・救援状況
- p.16 事務局から

КАЛЕНДАРЬ НА 2020 ГОД (34 ЛЕТ ЧЕРНОБЫЛЬСКОЙ АВАРИИ)



2020 チェルノブイリ34周年救援カレンダー

© 2019 国際チェルノブイリ子ども基金

## 放射線汚染地域に住む病気の子どもたちのための特別保養

2019年夏 ウクライナ・ベラルーシ

この夏もみなさまからのご寄付のおかげで、ウクライナとベラルーシの子どもたちを保養に招待することができました。ウクライナでは、財政難から、保養をはじめチェルノブイリの被災者支援がますます手薄になっています。また、父親が戦争に出ているという子どもが何人もおり、内戦の影響が身近な所に影を落としています。ベラルーシの保養に参加した腫瘍病の子どものうち、保養の最中、病院に定期検査に行った子が二人いました。一人の女の子は検査の結果があまりよくありませんでした。その子は、「お母さんをがっかりさせたくなかったのに…」と言いました。

### ウクライナの子どもの保養

■場所：ヘルソン州ゴーラヤ・プリスタニ地区  
子ども保養施設「ドルフィン」

■期間：2019年7月26日～8月6日（12日間）

■参加者：子ども41人（8歳～16歳／ジトーミル州ナロジチ地区及びオヴルチ地区、キエフ市）、引率者4人

■参加者の病名：腎盂腎炎、肺炎、慢性気管支炎、慢性扁桃炎、胆道運動異常症、足の奇形、多発性関節炎。

#### <引率者からの手紙>

今年の保養は、現地滞在10日間と往復の移動2日間の日程で行われました。大型バスに1日揺られて行きました（この移動がもっと楽ならよいのですが）。黒海沿岸の保養地ジェレズヌイ・ポルト（ザリズヌイ・ポルト）が目的地でした。この町にはとても沢山の色々な休暇施

設や滞在施設が揃っています。私たちの滞在中は、好天に恵まれましたが、海水温が低く（+20～22℃）、私自身はほとんど海には入りませんでした。しかし子どもたちはみんな大喜びで海水浴に繰り出していました。滞在中は連日、海に出て、夕暮れ時になるとみんなで参加するゲームの催しや子どもたちのためのディスコを開きました。私たちの保養グループの滞在環境や食事は、どれも申し分がなく、全員がとても満足して保養を行うことが出来ました。子どもたちは互いに新しい友達を見つけて、仲良くなりました。

私は、絵画と粘土細工、それに折り紙の教室を開きました（残念ながら、それ以外にクラブはありませんでした）。保養場所となった休暇施設は、ソビエト時代に建てられたとても古いものです。宿泊施設内はきちんと整備されていますが、敷地や娯楽設備は、老朽化が進んでいます。しかしスタッフや管理者は良い人たちでした。保養に参加した子どもたちはみんな大変気に入って、家に帰るのを惜しんで最終日には泣き出す子どももいるほどでした。その最終日、私たちはお別れコンサートを催し、子どもたちと舞台上で小さな出し物を行い、合唱しました。

私は、自分の子どもの頃のことを思い出しました。私も子どもの頃、夏休みになると子どもの保養キャンプに出かけたものです（かつては、国から子どもたちに無料の保養クーポンが支給されていました）。本当に沢山の楽しい思い出のあったことを覚えています。今回の保養



グループでは引率の人は皆、良い人たちばかりで、子どもたちも含め、和やかな仲間たちに恵まれていました。日本では、このような子どもたちの保養は行われているのでしょうか？

遠く離れたチェルノブイリの子どもたちに、今年もこのような保養の機会を与えて下さった日本の皆様に心より感謝致します。

(インナ・シネオカヤ キエフ市)

★子どもの頃甲状腺ガンの手術を受けた。2014年、チェルノブイリ子ども基金の講演のため来日。保養指導員の資格を持っており、娘とともに保養に同行した。

### <子どもたちの手紙（一部抜粋）>

★家族を保養に行かせてもらえる余裕が僕の家にはありません。14歳で初めて海に来ることが出来ました。楽しい時間を過ごせたこと、新しい友達に会えたこと、おいしい食事、素晴らしい指導員さんたちが世話をしてくれたこと、すべてに対して、日本の皆さんに感謝します。

(アンドリー・14歳・ナロジチ市)

★生まれて初めて海に来る機会をくれたことに対して、基金の皆さんに感謝しています。ここは、とても良い所です。夢を叶えてくれてありがとう。(マクシム・13歳・ナロジチ市)

★お父さんは重い病気で沢山のお金がかかります。だから、保養に招待してもらえて嬉しいです。日本の基金の皆さんのおかげで、僕たちはここに来ることが出来ました。日本でも原発事故があったと聞いて心配です。また来られるよ

うに、頑張りたいと思います。ありがとう!!!

(アントン・13歳・オヴルチ市)

★僕には弟とお母さん、お父さんがいます。お父さんは国境警備員で戦争に行きますが、何とか無事でいます。僕たちは海が好きです。ここでは美味しい食事が沢山食べられて、菓子パンやお菓子も出ます。支援してくれた日本の皆さん全員に感謝します。僕たちは日本のことも好きになりました。(ボフダン・11歳・キルダヌィ村)

★お母さんから、僕たちは日本の皆さんの支援で保養に行けることになったと聞きました。日本でも原子力発電所で事故が起きたそうですが、日本の皆さんに悪いことが起こらないで、良いことだけがあるようにお祈りしています。(マクシム・10歳・オヴルチ市)

★お母さんとお父さん、お婆さんは、チェルノブイリで働いています。お父さんは、放射能を測っています。そこには沢山放射能があります。私は3年間工芸学校に通っています。日本は、良い人たちが住んでいる国なんだなと思いました。またここに来たいです。(キーラ・9歳・オヴルチ市)

★お父さんは国境警備員で、戦場に出かけています。家族でいつも帰りを待っています。私は、この全部が気に入っています。ただ男の子たちが夜ドアをたたくの、ムカデが怖いんです。私は、日本がどこにあるのか分からないけれど、とても嬉しいです。海に連れてきてくれてありがとう。(ヴェロニカ・9歳・オヴルチ市)



## ベラルーシの子どもの保養

- 場所：子どもリハビリ・健康回復センター  
「ナデジダ（希望）」 ミンスク州ビレイカ地区
- 期間：2019年8月2日～8月25日（24日間）
- 参加者：子ども32人（8～17歳／ゴメリ市、レチツァ市、スヴェトロゴルスク市、カリニコヴィチ地区、ホイニキ地区、ゴメリ地区）、引率者2人（教師1人、看護師1人）
- 参加者の病名：脳腫瘍、目の腫瘍、精巣腫瘍、卵巣腫瘍、腎臓がん、肝臓がん、甲状腺がん、神経芽細胞腫、筋線維芽肉腫、リンパ管腫、血小板減少性紫斑症、血管腫。

バスで到着した子どもたちは、ナデジダの小児科医が診察し、それぞれの子どもに治療プログラムが立てられます。参加した子どもたちは腫瘍病、血液病の他、背骨、呼吸器官、心臓や胃など、他にも健康上の問題があります。そのような子どもたちの健康回復のために、個別の治療、食事、催し物、クラブ活動、心理サポートが行われます。

保養が行われたナデジダでは、同時期に、汚染地区の学校から保養に来ている子どもたち、病気の子供と親のプロジェクト（以上2つは国のプロジェクト）、他の外国NGOの支援による保養プロジェクト、スポーツクラブの合宿の子どもたちなどが滞在していました。グループの枠を超えて子どもたちは交流をし、仲良くなっていました。



## <医療>

医師の診察後、子どもたちそれぞれの体調に合わせた治療計画が作られます。一人の子どもが以下より3～4種類の治療を受けます。

：薬草茶、酵素カクテル、アロマセラピー、マッサージ、水療法（マッサージ効果のあるシャワー、ジャグジー、薬草入りの風呂）、ステレオセラピー（天然の岩塩で囲まれた部屋で過ごす。呼吸器官の病気に効果がある）、運動療法。屋外の小さな公園の中に、「感覚の小道」というコーナーがあります。ドイツの団体により作られたもので、木の実、苔、さまざまな形状の石ころ、コルクなどが順番に敷き詰められており、手すりにつかまりながらその上をゆっくり歩く、というものです。横には、足裏のツボと効果が描かれた看板があります。子どもたちはこのコーナーが大好きで、天気の良い日はそこを歩き、「気持ちがいい」「ちょっと痛い」とはしゃぎながら歩きます。

## <食事>

栄養バランスの取れた安全な食事1日3回のほか、軽食が3回提供されます。ナデジダの敷地内にある自前の農場では、ドイツの支援団体から指導を受けた環境に配慮した農業が行われています。食事には、野菜、果物、果物の無添加ジュースなどが毎日出されます。軽食には乳製品や、果物、食堂で手作りされた菓子パンなどが出されます。パンや菓子類のある売店もありますが、食事・軽食とも十分な量が出されるため、買い物の必要はほとんどありません。



## <心理>

保養の効果を得るためには、グループ内の良い雰囲気は欠かせません。子どもたち同士がお互いを知り、仲良くなるための手助けとして、グループで楽しめる催し物が心理カウンセラーによって行われます。心の問題を抱える子どもには個別に、またはそのような子どもたちだけのグループでカウンセリングが行われます。今回のグループでは4人の女の子たちに、自律訓練法、アートセラピーなどが行われ、心身のリラックス、自分の心を自制する、人に心を開くこと、などを得ました。効果を実感した彼女らは、薬だけでなく、心理療法が健康回復に役立つことに驚き、「このような興味深い療法は、他にも必要な人にもっと教えてあげたい」と言いました。

## <教育活動・催し物・クラブ活動>

保養の大きな課題の一つは、それぞれの子どもが前向きな気持ちになれるような雰囲気をつくること、それぞれの才能を見つけ、それを伸ばせるようにすることです。その意味で、催し物やクラブ活動も、保養の一環として行われます。

施設内にある資料館には、かつて子ども基金が贈った「チェルノブイリ原発 30 キロ圏内立体模型地図」があります。これを使って子どもたちはチェルノブイリ事故とその影響について学びます。また環境教育にも力を入れています。自然環境の大切さを、ナデジダで行っている太陽光エネルギー、木質チップによるバイオマス



エネルギーから学び、また生活の中でゴミの分別を行っています。

施設では毎日催し物があり、グループ単位や、個人で参加します。お芝居やダンス、歌を舞台上で披露したり、ゲームや絵のコンクールに参加したりします。仲間同士一緒に考えたり、一緒に作ったり、練習したりする中で、結束力が高まります。コンクールで賞を取ったりすると、みんなで大喜びです。クラブ活動には、手芸、絵画、シンセサイザー、木工細工、陶芸、折り紙を含む紙細工などから、いくつか好きな教室を選べます。

天候の良い時にはなるべく自然の中で体を動かしながら過ごそうにします。施設内の林の中を散歩したり、サイクリングをしたり、湖まで散歩にいたりします。施設内には多くの遊具もあります。

このようなことを通じ、子どもたちは心身ともにリラックスし、心から楽しみ、仲良くなり、保養の効果が高まる、と考えられています。参加者の年齢は8~17歳と開きがありましたが、大きい子は小さい子の面倒を見ていました。小さい子でも、率先して先生たちの手伝いをする子もいました。保養の最後に行ったアンケートでは、全員の子どもが「またナデジダにきたい」と答えました。

## <参加した子どもたちの感想>

★このような素晴らしい保養に招待してくれた日本の子ども基金に深く感謝しています。私たちはナデジダで心から楽しんで過ごしました。

(アーニャ 16歳 レチツァ市)

★毎日色々な催し物があった。僕は友達と過ごしたことで、陶芸教室が特に楽しかった。またここに来たい。(イワン 9歳 モーズィリ市)

★私たちのグループの引率者、ナデジダのお医者さん、看護師さん、先生たち、みんな優しかった。日本のみなさんありがとう。

(リーザ 10歳 ゴメリ市)

(報告 佐々木真理)



子ども基金が支援しているベラルーシ・子ども健康回復センター「ナデジダ（希望）」は1994年9月24日にオープンしました。その25周年祝賀式が9月23、24日に行われ、佐々木事務局長と小寺隆幸・小寺美和、および球美の里の三井さんが参加しました。

ナデジダについてはこれまで基金ニュースでお伝えしていますが、この機会にぜひホームページをご覧ください。英文もあります。

<http://www.nadeshda.by/en> その中の“about us”を開くと創立団体として、「ベラルーシ共和国非常事態省」、「NGO 社会環境全国法人《真のパートナーシップ》」、「子どもセンター・ナデジダの友達」（ドイツ国内の8つの社会団体の連合体）が、そして永続的パートナーとして「チェルノブイリ子ども基金」が明記されています。

ここが作られた経緯を簡単に紹介します。ナチスドイツは大戦中にベラルーシの人口の4分の1にあたる220万人を虐殺しました。戦後、ドイツの教会はその謝罪と和解の取り組みを行っていましたが、そのさなかの1986年にチェルノブイリ原発事故が起きました。後にナデジダの設立者の一人となるベラルーシの化学者は、放射能汚染地の様子を目にし、このままではいけないと考えました。ドイツとの接点のあった彼は、同志と共に子どもたちをドイツで保養させる取り組みを始めました。その後、ベラルーシ国内に保養所が必要という考えが生まれ、ドイツから教会の信者たち、退役軍人等がボランティアとして参加し、ナデジダを建設したのです。

日本の子ども基金もそこに当初から関わり、募金や様々な教材を提供してきました。

そのような経緯があり、今回の25周年式典に子ども基金はドイツの団体とともに招待されたのです。

### 《25周年式典でのトークセッション》

23日午前中は「ナデジダの歴史：創設の動機とナデジダのプロジェクトの発展段階」というテーマで9つのセッションが行われました。最初の

「創設の動機」というセッションでは、私が、この日参加できなかった子ども基金共同代表の向井さんの次の思いを皆様にお伝えしました。

「1993年にミンスクを訪問したときペトリャエフ教授（ベラルーシの教育学者）にお会いし、ナデジダの建設予定地を見せてもらいました。彼は“健康を守るのはもちろんだが、子どもたちの教育が大事であり学校としての機能もあわせもったセンターをめざしている。日本には、保養費のほかに学校設備、教材を支援してもらいたい”と熱く訴えられました。そこで日本で呼びかけ、全国から集まったたくさんの文具や楽器をコンテナで輸送したのです。支援が25年も続いていることに驚いています。お互いの信頼関係と子どもを守りたいという気持ちに国境はないと思います。」大きな拍手をいただき、故ペトリャエフ教授とともにこのセンターの創設に関わった方が、あとでわざわざ話しかけてきてくださいました。

このセッションでは福島や球美の里についても聞かれ、原発事故後、日本が国として子どもたちを保養させていない問題を指摘しました。

次いで「サナトリウム・治療、健康回復プロジェクト」のセッションでは佐々木さんが、基金独自の「甲状腺手術後の子どもたちの保養」（現在は様々な腫瘍も含む）や「甲状腺手術を受けた親とその家族の保養」の意義を語りました。この取り組みの成功が、ナデジダのプロジェクトを発展させるきっかけになったのです。



写真：左からマクシンスキー所長、佐々木さん、ベラルーシの団体の代表、ドイツの団体の代表

さらに「海外団体のプロジェクト」のセッションでも佐々木さんが登壇し、ボランティアとして最初に参加した日本週間の取り組みが子どもたちの目を輝かせただけではなく、佐々木さん自身の人生も変え、今ここにいると語られ、大きな拍手が起こりました。

### 《アスレチックパークのオープニング》

23日午後は、式典参加者がグループごとに各施設を回り様々な体験を行った後、夕方から、ドイツ側とベラルーシの協力で作られたアスレチックパークのオープニングが行われました。子どもたちが見守る中、挨拶、子どもの歌、テープカットがあり、その後子どもたちがたくさんの遊具を試しました。それぞれ、協力しないと達成できないものばかりで、遊びを通して協同を学ぶという理念が具現化されていました。



23日夜は祝賀の食卓会。数十名が参加したドイツの盛大な合唱の後で、「ナデジダの将来も、カエルのように高く遠くまで」と話してから私達4人は「蛙の歌」の輪唱。場を和ませたようで意外にも絶賛を浴びました。

### 《祝賀儀式、植樹、子どもたちの習字》

24日朝は、正教会、カトリック、プロテスタントの宗教者合同の祝賀儀式が行われました。子どもたちの歌もあり、和やかな式でした。その後、参加団体による9本のカエデの植樹を行いました。

さらに、保養中の約300名の子どものためのプレゼントとして様々なアクティビティが設定されていました。日本コーナーでは習字体験。2つの部屋で一回



25名、6交代で実施しました。初めて毛筆や墨汁に接してわずか15分で「希望」を書くのは容易ではありませんが、皆真剣でした。

### 《子どもたちと25周年を祝う》

午後は祝賀式典。「ナデジダ25周年：過去を思い出し、今を大切にし、未来をつくろう」と掲げられたステージで、ベラルーシ共和国大統領総務局人道活動部長、駐ベラルーシ・ドイツ大使などとともに佐々木さんがお祝いの挨拶をしました。その後、保養中の子どもたちと25周年を祝いました。

子どもたちの歌や踊りのあとで、私たち4人がジェスチャーを交えて「幸せなら手を叩こう」を歌うと、大人も子どもも隣の肩をたたきあったりして、全員が一つになったようでした。最後に子どもたちが箱を組み合わせ、25周年のロゴを完成させました。



この二日間、ナデジダの職員やドイツの支援者から直接、熱い思いや当時の苦労を聴くことができました。その結晶として医療、教育、心理的支援の3つを「保養」の柱とするナデジダの理念が作られてきたのです。この経験は福島原発事故後の日本のこれからのこそ生かさねばならないと強く思いました。

チェルノブイリ子ども基金  
共同代表 小寺隆幸

ナデジダ 25 周年記念式典の中で行われたセッションでは、各団体の代表者が舞台上で、ナデジダ側からの質問（以下、四角で囲んだ部分）に答える形で行われました。子ども基金が登壇した内容は以下の通りです。

#### 「サナトリウム・治療、健康回復プロジェクト」について

1. チェルノブイリ子ども基金が 1995 年にナデジダで、甲状腺手術後の子どもたちの保養を開催する、という考えはどのように生まれたのですか？

「甲状腺がんの手術を受けた子どもたちは、病気によって体だけでなく心も傷つきました。子どもたちを治療するのは病院の医者です。私たちは子どもたちを精神面で助けたいと思いました。子どもたちが笑顔や心の元気や、生きる希望を取り戻してほしかったのです。さらに、自分は一人ではなく、自分と同じような友人が多くいて、自分を理解し助けてくれる、ということを知ってほしかった。

そのためには、子どもたちがおだやかに、安心して過ごせる場所が必要でした。そしてそこには、このような子どもたちをよく理解する専門家が必要でした。それがナデジダでした。」

2. チェルノブイリ子ども基金はここ数年、ナデジダでどのようなプロジェクトを行っていますか。そしてそれはなぜですか？

「子ども基金は、ナデジダで年に 2 回プロジェクトを行っています。そのうちの一つは、家族の保養です。これは、子どもの頃に甲状腺がんの手術を受けた若い母親、父親と、彼らの子どもたちのための保養プロジェクトです。甲状腺手術後、彼らは生涯ホルモン剤を服用し、常に健康を管理する必要があります。子どもたちは免疫力が低いため、体が弱いのです。

二つ目は、いろいろな悪性の病気、血液の病気、リンパ系の病気の子どもたちのための保養プロジェクトです。手術後、治療後の子どもたちには心と体の保養が必要です。そのため、私たちは 2 つのプロジェクトを行っています。」

3. チェルノブイリ事故により被害を受けたベラルーシの子どもたち、家族たちを支援するために、長年にわたり日本の市民がチェルノブイリ子ども基金に資金を提供する理由は、あなたの考えでは何だと思いますか？

「最初は、日本では広島と長崎の経験があったからだと思います。日本は原爆、チェルノブイリは原発ですが、人々は放射能による被害を受けました。日本人は放射能による被害が長く続くことを知っていました。そして福島原発の事故後、人々は再びチェルノブイリを思い出しました。また、チェルノブイリ子ども基金は常に、チェルノブイリのこと、ナデジダのこと、子どもたちの情報を、支援している人たちに伝えています。このようなことから、人々は今もチェルノブイリの子どもたちを助けたいと思ってきているのだと思います。」

このセッションでは、子ども基金のほか、「ベラルーシ子ども基金」（心臓病の子どものための支援団体）と、「チェルノブイリの子どもの友人・ビュルテンブルグ」（ドイツ）から代表が登壇しました。

#### 「海外 NGO 主催のプロジェクト」について

1. チェルノブイリ子ども基金が 1990 年末から 2000 年初めにかけてナデジダで行った、「東京週間」「日本フェスティバル」「日本週間」の開催の理由は何ですか？

「私たちは甲状腺がんの手術を受けた子どもたちを支援しようと考えました。東京週間、日本週間では、日本文化に関するいろいろな教室を開きました。外国の文化を知ったり、新しい

何かを見たり経験すること、これは子どもたちにとって面白いことです。これらを通じて、喜び、満足感、自信を持つことができます。病気のことを考えず、このような気持ちを持ってほしかったのです。さらに、遠い国・日本の人たちが応援しているということ、その日本を身近に感じてもらえたらよいと思いました。」

2. 日本とベラルーシ市民の相互関係の発展の観点から、ナデジダを出会いの場、交流の場と名付けることができますか？

「はい、私はそう思います。これまで日本のボランティア、学生、教師たちがナデジダに来ました。彼らは子どもたちや職員たちと交流しました。福島原発事故後、ナデジダの経験から、2012年10月、日本に、子どもセンター「沖縄・球美の里」が作られました。2年前、福島から日本の母親たちと子どもたちがここへ来ました。そのとき、ベラルーシの母親たち（子どもの頃甲状腺がんの手術を受けた）と子どもたちもここにきて、彼らは一緒に過ごし、交流しました。ナデジダはまさに、出会いと交流の場所だと思います。」

このセッションでは、子ども基金のほか、ナデジダでプロジェクトを行っているドイツの2団体と、海外プロジェクト担当のナデジダの職員が登壇しました。

このほか、ナデジダで行われてきた（現在も行われている）教育、心理学、医学、農業、建築、エネルギーなど、合計9つのテーマについて、ドイツの団体、ベラルーシの団体、ナデジダの職員が登壇しました。

ナデジダの所長マクスィンスキー氏と、共同経営者のアストリッド氏がセッションの質問者役を交互に務め、二人揃って祝賀会の最初と最後を締めくくりました。

途中1回の休憩を挟み約4時間のセッションでしたが、参加者はみな最後まで各登壇者の発

言に熱心に耳を傾けました。「自分たちで作りに上げてきたナデジダについて語られているので、どの発言も自分の子どものことのように聴いていたのではないかと、あるナデジダの職員は感想を述べました。

アスレチックパークが作られた敷地は、ナデジダの施設と道路を挟んだ向かい側にあり、林の中に夏の間だけ利用できるコテージが点在しています。そこに、今回式典に参加したドイツの団体が、丸太で手作りの家を建てました。私たちの滞在中は外側が完成したところでしたが、25周年式典の1週間後には内部も完成し、お披露目が行われたそうです。

ドイツ側参加者は、9団体76人でした。中には高齢の方もあり、ナデジダを最初から支えてこられたのだということが見て取れました。ドイツの人々の熱心さには、戦争中に自分の上の世代の人たち（祖父や父など）がベラルーシに対して行ったことへの謝罪の気持があるから、とナデジダの職員は話しました。当初、ドイツ人たちが支援のためにチェルノブイリ汚染地の村などに行くと、戦争の記憶のあるベラルーシの老人たちは不快感を隠さなかったといいます。しかしこのように長年にわたりベラルーシのために尽くしている姿を見れば、「戦争は彼ら自身がしたことではない、でも彼らはちゃんと尽くしてくれている。それなら自分たちも受け入れよう」という気持になるのではないのでしょうか。

（報告：佐々木真理）



ドイツ団体の参加者



### アレルギーは治るという話

アレルギー疾患について、昔から説明に悩んで来ましたが、最近ようやく結論に達しました。「アレルギーは生後に作られるものであり、多分に親の育て方に左右され、大きくストレスが関与している」ということです。

かつて国立埼玉病院に勤務していた時代には、抗生物質アレルギーに対して入院させて治療したこともありましたが、気管支喘息の減感作療法をしていて、原因であるアレルゲンが変化することも経験しました。

アレルギーは治すことができます。しかし、ひとは25歳を境にこころ、つまり気持ちの持ち方を変えることが難しくなりますので、大人に対しては難しいですが、子どもは医者の方の言うことを信じてくれますから治しやすいです。

赤ちゃんのアトピー性皮膚炎は、育て方で治すことができます。赤ちゃんをいつも「いい気持ち」にしてあげることです。それには、赤ちゃんを必要以上には触らないこと。親だけでなく、祖母や伯母や兄、姉たちが触らないことです。赤ちゃんが欲求していないのに抱っこをしてはいけません。それだけで症状は良くなります。もちろん今できている皮膚症状に対してはステロイドを使います。2週間以内で切りあげればステロイドの使用は問題ありません。

アトピー性皮膚炎のある中学生の男子に対して、「なぜ病気になるか、どうすれば治るか」を説明し、皮膚症状はステロイドで治

療したことがありました。2週間後、全身にあった発疹はきれいに治り、本人は「自分で治した」と威張っていましたが、それは私のいう通りに気持ちの持ち方を変えたからでした。

私は後に、心療内科に出会いました。心療内科の創始者九州大学の池見西次郎教授のレポートです。うるしかぶれの人に催眠療法をかけて催眠下にうるしを塗って、「水を塗った」というと反応しない人がほとんどで、実際には水をぬって「うるしを塗った」というと、かぶれてしまう人がほとんどであった。

その延長として、合計81人のいろいろなアレルギー疾患、蕁麻疹、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、気管支喘息、うるしかぶれなどの人たちに、第一には説得療法、それで治らない場合には催眠療法を施した。結果、79人が治り、残りの2人も軽症化した、というものです。私も催眠療法の技術を学び治療に用いることができるようになりました。

大人の場合は、「アレルギー」という言葉に惑わされて思い込んでしまう人が多く、説得療法だけでは難しいと感じます。しかしアレルギーは治ります。多分、これを認めてくれる医師は本当の心療内科医（ほとんどが精神科医だからだめ）だけだと思いますが。

黒部 信一

すずしろ診療所所長 小児科医師

ブログ <http://kurobe-shin.no-blog.jp/>

## “国と福島県と一体となった 「棄民政策」を止めよ！”

福島県は、病気や貧困などから、避難先の国家公務員宿舎を退去できずにいる福島原発事故避難者に対し、「退去せよ。4月分から2倍の家賃・駐車場代を払え」という請求書を毎月送り続け、追い詰めています。

福島県は、メディアの取材に「最後の1人が退去するまで続ける」と言明しています。国と一体となった人権蹂躪、究極の「棄民政策」の強行を断じて認めてはなりません。これは、福島原発避難者の住まいと人権を守ろう！と集会参加を呼びかける文書です。（主催：住まいと人権を守ろう！10・26集会実行委員会）

また、福島原発かながわ訴訟原告団が、今年9月5日発行した（原告団だよりNo.0037号）は次のように伝えています。

### 「2倍家賃」国連に人権侵害訴え

国家公務員宿舎に入居している原発事故避難者に対し、福島県が懲罰的「2倍家賃」を請求し、政府がこれを容認している問題で、原発被害者団体連絡会（ひだんれん）、「避難の権利」を求める全国避難者の会、避難の協同センターは、共同行動の一環として8月19日、NGO国際人権活動日本委員会（JWHCR 鈴木亜英会長）を通じて、国連人権理事会42会期（9月9日開会）に向け、人権侵害の実態を訴え、特別報告者の派遣を要請する意見書を送りました。

一方、福島県は8月初め、避難者に対し4月分に続き5月分の請求書も送り続け、「最後の1人が退去するまで請求を続ける」と言明（「民

の声新聞」）。さらに、契約を結ばず調停が不調に終わった5世帯について、「追い出し訴訟」を起こすことを、9月県議会に提案するという強硬姿勢を露にしています。

3団体では、福島県と政府に対し、これらの中止と撤回を求めると同時に、追い詰められている当事者を守る運動を国内外に向けて広く呼びかけています（以上、「原告団だより」より）。

2011年3月の東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故により、最大16万4,865人の人々が避難を余儀なくされ、関連する死者は2,274人、自殺者112人、子ども甲状腺がんは223人という多大な犠牲を生みました。原発事故は終わっていません。

なお、広くこの問題を知ってもらうために、加藤登紀子さんのチャリティコンサートを企画しました。まわりの方にコンサートのことも広めてくださるようお願いいたします。

山形県南陽市 長島 黎二

\*\*\*\*\*

★長島さんは長くチェルノブイリ子ども基金の支援者で、福島原発事故後は、山形県へ避難した福島の方々への支援をされています。11月8日(金)原発事故避難者支援「加藤登紀子チャリティコ



ンサート」が、山形県南陽市「シェルターなんようホール」で開催されます。詳細は本号最終頁をご覧ください（一部地域の方々にはコンサートチラシを同封しています）。

\*\*\*\*\*

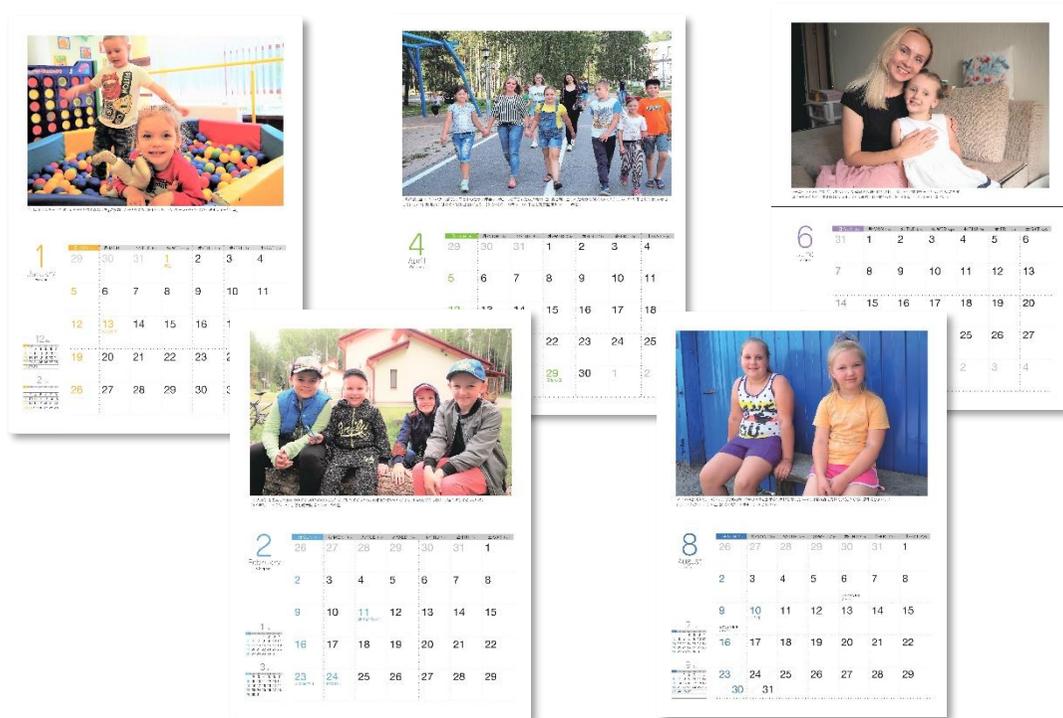
## 2020年チェルノブイリ34周年救援カレンダー

～チェルノブイリと福島の子どもたちの救援にご協力ください～

\*\*\*\*\*

毎年好評いただいているチェルノブイリ救援カレンダー、2020年版が完成しました。保養に参加した親子や、日本の里親から支援を受けている子どもたちの写真で構成されています。

場所をとらないコンパクトなサイズです。ご自身で、職場で、またご友人などへのプレゼントにもぜひご活用ください。ご注文をお待ちしています。



- 定価 800円 送料別 (6部まで 200円) (10部以上: 1部 700円/送料別)
- お申し込み方法: E-mail、Fax または 郵送でお申し込みください。
- お支払方法: お届けするカレンダーに同封の郵便振替用紙でお振り込みください。
- カラー、サイズ: 縦 30cm×21cm (見開き A4サイズ) ※2019年版と同様のサイズです。
- 撮影: チェルノブイリ子ども基金 佐々木真理
- デザイン: 川島進デザイン室
- 発行・制作: チェルノブイリ子ども基金

★カレンダーの収益は、チェルノブイリと福島原発事故により被災した子どもたちの救援金にあてられます。2019年版の収益は57万円でした。

## 販売品のご案内 ～収益は子どもたちの薬代や保養費用として活用されます～

### ① 「リネンクロス」ベラルーシ製

800円 サイズ：45～50cm×70cm

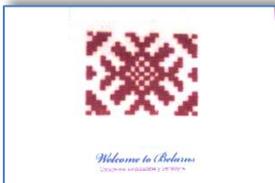
テーブルクロスや、台所用ふきんとして使えます。プレゼントにも最適です。色、柄はお任せください。



### ② 「メッセージカード」ベラルーシ製 (ハンドメイド)

300円 サイズ：10cm×15cm

白地に赤色の模様（模様の部分は布）。開いて中にメッセージを書き込めるようになっています。誕生日カード、クリスマスカードなどに最適です。柄はお任せください。



### ③ 「マトリョーシカのマグネット」

### ④ 「マトリョーシカのキーホルダー」 (ハンドメイド)

500円 サイズ（およそ）③縦6cm x 横幅4cm

④縦4cm x 横幅2.5cm

クリスマスや新年のプレゼントなどにも最適です。色・柄はおまかせください。

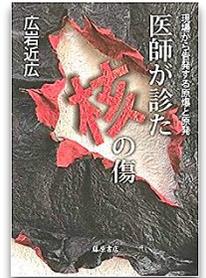


### ⑤ 書籍『医師が診た核の傷 ー現場から告発する原爆と原発』

～23人の医師が実名で渾身の告発！絶対に“核と人類は共存できない”～

広岩近広著（藤原書店）

2,200円



血液や甲状腺の専門医をはじめ臨床経験の豊富な内科医や精神科医らが、原爆と原発の核被害者の「核の傷」について報告した貴重な記録。『毎日新聞』連載をもとに改稿・加筆。

【目次】隠された惨劇／原爆編（息をのんだ人間の末期—外傷がないのに吐血、脱毛、そして悶死／染色体異常が生む多重がん—すべての臓器に起こるがん／不安に苛まれ続ける生涯—被爆者への無理解・誤解・差別）／原発編（多発する子どもたちの甲状腺がん—チェルノブイリからフクシマへ／福島が学ぶチェルノブイリ—子どもたちを守るために／老朽原発が生み出す労働者被曝）

“黒部ドクターのお話し”（本号10頁）でおなじみの黒部信一さん（小児科医、「未来の福島子ども基金」代表）のインタビューが掲載されています。

\*\*\*\*\*

●ご注文方法：（1）住所（2）氏名（3）電話番号（4）希望品名と数量を明記の上、FAX・TEL・メールのいずれかでお申し込みください。

●送料別（実費）

●お支払い方法：振込用紙を同封しますので、品物が届きましたらお振込みください。小額の場合は切手でのお支払いも可能です（封筒に金額分の切手を入れてお送りください）。

## 里親募集のお知らせ

チェルノブイリ子ども基金では1998年から甲状腺手術後の子どもたちの里親支援を開始しました。日本の里親が一人の子どもに対し、月50ドルを2年間支援していただくものです。2年経過後に再度里子の情報をお伝えし、支援の継続・終了を里親に決めていただきます。これまでに309人の子どもたちが日本の里親の支援を受けました。現在、さまざまな腫瘍病、血液病など63人の子どもたちが支援を受けています。

現地団体より、新たな子どもの支援要請が届いています。ご関心のある方は事務局へご連絡ください。詳しい資料をお送りいたします。

### アンナ 8歳

ベラルーシ チェチェルスク市

腎臓の悪性腫瘍。アンナの母親は病気で死亡。父親（1985年生まれ）は子どもの頃に甲状腺がんの手術を受けた。

### ワルワラ 4歳

ベラルーシ ゴメリ市

急性白血病。生後4か月で発病。化学療法を受けた。ワルワラの母親（1989年生まれ）は、12歳で甲状腺がんの手術を受けた。父親（1986年生まれ）は、22歳で結核を発病し治療を受けた。

### ヴェロニカ 7歳

ベラルーシ ドーブルシ市

肝臓がん。肺への転移を伴う。10クルの化学療法を受けた。母親が亡くなり、祖父母の下で暮らしている。

### アリーナ 15歳

ベラルーシ ゴメリ州ホイニキ地区

2018年5月に甲状腺がんの手術を受けた。手術後放射性ヨウ素治療を受けた。

## ウクライナ「内分泌研究所」より

子ども基金は、2018年12月、ウクライナ「内分泌研究所」に甲状腺ホルモン剤、放射線測定器の購入費用を支援しました。現地からの報告をご紹介します。

\*\*\*\*\*

### チルノブイリ子ども基金のみなさま

甲状腺がんの患者へのご支援に心よりお礼を申し上げます。

ご支援いただいた資金により、308,500箱のチロキシシン（甲状腺ホルモン剤）を購入しました。この薬は、甲状腺がんの患者の治療のために使われます。これは患者にとって特定量、毎日、生涯、不可欠な薬です。今日時点（2019年6月19日）で、358人の甲状腺がんの患者に140,400箱が手渡されました。

また、甲状腺がんの患者の放射線治療が行われる場所で使用する放射線測定器7台のご支援に感謝いたします。

薬の支援を受けた患者たちからも感謝の気持ちを伝えます。これからも協力関係が続くことを祈ります。

内分泌研究所 所長 N.D. トロニコ

\*\*\*\*\*

13歳で甲状腺がんの手術を受けたウクライナの女性（現在37歳）は、最近の検査で、他の臓器に転移のあることがわかりました。これからさらに検査、治療が必要となります。「チェルノブイリ事故からこんなにも年月が経っているのに、病気は私の体から離れて行ってくれない」と訴えています。



# 募金・救援状況



## ●募金状況 2019年6月～9月 (単位:円)

|         | 6月        | 7月        | 8月        | 9月      |
|---------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 募金件数    | 79        | 124       | 30        | 31      |
| 救援寄付金   | 1,112,800 | 699,980   | 1,329,960 | 119,210 |
| 保養費     | 46,000    | 170,000   | 30,580    | 16,000  |
| 里子支援    | 104,450   | 1,427,143 | 293,470   | 58,880  |
| ニュース購読費 | 28,000    | 44,000    | 16,120    | 12,000  |
| 合計      | 1,291,250 | 2,341,123 | 1,670,130 | 206,090 |

\*その他、切手、はがき、商品券、文具等のご寄付をいただきました。

## ●救援状況 2019年6月～9月 (単位:円)

|                       |           |
|-----------------------|-----------|
| <ウクライナ>               |           |
| ◎チェルノブイリの子どもたちの生存     |           |
| 里子支援 (半年分×8人、1年分×1人)  | 327,600   |
| 緊急支援 (半年分×2人)         | 65,520    |
| 現地銀行手数料               | 3,276     |
| <ベラルーシ>               |           |
| ◎困難の中の子どもたちへ希望を       |           |
| 里子支援 (半年分×49人)        | 1,599,948 |
| 緊急支援 (半年分×4人)         | 130,608   |
| ◎チェルノブイリのサイン          |           |
| ◎子どもリハビリ・健康回復センター「希望」 |           |
| 子どもの保養費用              | 1,263,695 |



ベラルーシの保養に参加した女の子。募金者の方からいただいたレターセットを手に。



## ♡ 団体名一覧 ♡

(順不同・敬称略)

紙面の都合上個人名は省略させていただきます。ご寄付をいただいたみなさまに心よりお礼を申し上げます。

### 【6月～9月】

チェルノブイリ子ども基金 横浜  
 チェルノブイリ子ども基金 奥羽  
 三重チェルノブイリ被曝児童救援募金  
 カトリック徳田教会  
 東京一般労組東京音大分会  
 実教出版労働組合 NNJ  
 イエス・キリスト教会 祈りの家  
 自治労日野市職員組合

## <みなさまからのメッセージ>

◆わずかですが、カンパです。困難な状況の中で、活動をつづけていただきありがとうございます。(東京都Iさん) ◆チェルノブイリ、ユニセフ等、子ども達の健康や生活が安定して守られますよう祈ります。(青森県Tさん) ◆(6月号ニュースは)いつもより分厚く感じ、興味深く拝見。両国の民の声がたくさん集録されていたので、そして明るい声ばかりだったので、一気に読み終えました。娘にもこのニュースレターを送ります。(山梨県Kさん) ◆日頃の皆様の貴重な取り組みに頭が下がる思いです。(神奈川県Kさん)

## ★募金振込口座のご案内★

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。同封の振込用紙によるお振込のほか、以下の口座へ直接お振り込みいただけますので、ご都合のよい方法をご利用ください。※振込用紙以外でお振込の場合は、お名前、金額、ご寄付の内容のご連絡をお願いいたします。

(1)郵便振替口座 00160-4-98316 口座名 チェルノブイリ子ども基金

(2)ゆうちょ銀行口座 店番 019 店名 〇一九店(ゼロイチキウ店)

預金種目 当座0098316 受取人名 チェルノブイリコドモキケン

(3)三菱東京UFJ銀行 支店名(番号):新宿中央支店(469)

口座番号:普通 1688367 口座名:チェルノブイリ子ども基金

# 事務局から

## \*\* ご協力いただいているみなさまへ \*\*

いつもあたたかいご支援をまことにありがとうございます。振込用紙と領収証につきまして、みなさまにお知らせとお願いです。

### すべての方に振込用紙を同封しております

事務作業の都合により、まことに勝手ながらすべての方に郵便払込用紙をお送りしております。決して募金を強要するものではありません。また、すでに通信費・寄付金を納入された方はどうぞご容赦ください。

### 払込取扱票のお名前・ご住所は楷書で ご記入ください

郵便局からは払込取扱票のコピーが届きます。文字がかすれて判読しづらい場合がございますので、楷書でわかりやすくご記入ください。

### 「受領確認の葉書」をご希望の方へ

通信費・寄付金を納入された方で、受領確認の連絡をご希望の方には、葉書(金額は記載せず)をお送ります。振込用紙の該当欄に印をつけてください。

## ■原発事故避難者支援

### 加藤登紀子チャリティコンサート

- ・日時:11月8日(金) 18:00 開場 18:30 開演
  - ・入場料:4,500円(全席指定・税込み)
  - ・場所:シェルターなんようホール 南陽市文化会館(南陽市三間通 430-2)
  - ・主催:原発事故避難者支援 加藤登紀子チャリティコンサート実行委員会
- 【お問合せ】実行委員会事務局 0238-40-2886 (長島さん)



## ■ボランティア募集

ニュース発送作業(年3回:2・6・10月):お手伝いいただける方を募集します。どなたでもお気軽にご参加ください。次回予定 2/22(土)午前11時~午後3時頃まで。ご都合のよい時間帯だけでも大歓迎です。場所:東京ボランティア・市民活動センター(飯田橋駅ビル セントラルプラザ10階) ※日程が変更になる場合もありますので、ボランティア参加希望の方は、前日までにメールかお電話でご連絡ください。電話は平日午前10時~午後5時。留守の場合は伝言をお願いします。

## ■「基金ニュースター」について

募金をくださった方には、使途の報告としてニュースターをお送りしています。またニュース購読費(2,000円/年)も募っております。印刷・発送などの経費の残金は、募金として使わせていただきます。(※ニュースターは子ども基金のHPでもご覧いただけます。今後、郵送がご不要の方は、お手数ですが事務局までご連絡をお願いいたします。)

## ～ 編集後記 ～

◆このニュースの編集の最中、各地で台風の大きな被害がありました。被災されたみなさまに心よりお見舞いを申し上げます。そして1日も早く平穏な生活に戻れますようお祈りいたします。

◆オペラ歌手佐藤しのぶさんの訃報。子ども基金の招待で、佐藤さんは1997年にベラルーシの「ナデジダ」でコンサートを行い、生の歌手の歌声に、保養中の子どもたち、ナデジダ職員たちは大変感銘を受けました。この様子は基金ニュース No.30(97年9月)に掲載。佐藤さんのご冥福をお祈りいたします。

◆子ども基金にとっても困難な1年でしたが、みなさまのあたたかいご支援のおかげで活動を続けることができました。みなさまに深くお礼を申し上げます。これからどうぞよろしくお祈りいたします。

●チェルノブイリ子ども基金 NEWS 年3回(2・6・10月)発行●

〒177-0041 東京都練馬区石神井町 3-16-15-408

Tel/Fax 03-6767-8808 E-mail: cherno1986@jcom.zaq.ne.jp

◇ウェブサイト <http://ccfj.la.cocan.jp/>

◇事務局ブログ <http://blog.goo.ne.jp/cherno1986jimukyoku/>

※当基金は任意団体のため、ご寄付は税金控除の対象とはなりません。ご了承ください。